



1. 建設部門に“みのりの秋”を
2. 環境の整備と精神の整備
3. 年々増大する建設投資

1. 先般の羽越地方を襲った集中豪雨によって加治川の堤防が昨年に続いて決壊したとの報道に、少なからず衝撃を受けた会員も多いのではなかろうか。昨年の水害直後に着手された本格的改修工事の進行のさなかに、またも“気象台始まって以来”の豪雨に見舞われ、昨年のそれを大きく上まわる出水をみて仮堤防が切れたのである。わが国は、その地理的環境にねぞす複雑な自然現象からまさに天災国といえよう。この加治川の例についてもそのきびしさを再認識させるのである。この天災国の宿命を克服し、豊かな国土を建設していく責務の多くはわれわれ土木技術者に課せられている。このためには災害によって得られた多くの貴重な教訓を生かし、基礎研究面、応用技術面、事業執行面からの広い視野に立った知恵を凝集し、その推進におよ一層の努力を傾けなければならない。

本年の稲作は史上最大の豊作と報ぜられ、まさに“みのりの秋”を迎えている。大規模な工事が数多く計画され、進められ、完成してはいるものの、建設部門の“みのりの秋”は、天災国という看板を引きおろすことができるときに訪れるのであり、その日の早いことを願うものである。 [J]

2. 暑さに耐えかねて輾転とした夜も、枕の下に虫の声を聞く夜と変わり、季節の歯車は狂いなく、今年もまた台風の訪問が頻りである。22号台風は、四国地方を目指して北上してきたが、やはり9月台風の例にもれず、北東に進路を変え、房総沖をかすめるコースをたどった。7月、8月、9月、10月と各月の台風の進路はおのおの決まっています、まことに規則正しい。

このような規則正しい自然の変化に合わせて、各種公共工事を推進すべしとの声は、毎年、聞かれるところであるが、何分にも、自然の力は偉大であり、人力の遠くおよぶところではない。しかし、両者の融合に努めることが、われわれ土木技術者の使命である。今年も、交通事故の報が、新聞紙上にのらない日は珍らしい。先日は、右側通行中の一家の後方から乗用車が突っ込んだ死傷事故と、安全地帯に泥酔運転のトラックが飛び込んで学生に重傷を負わせた事故が報ぜられていた。自動車運転免許は、相互信頼の原則を基に交付される。歩道を分離し、歩道橋を架設し安全地帯を設置しても、この原則にしたがわぬいひずんだ人格には、土木技術者の努力も徒労に終る。

日本経済の驚異的な発展とともに、環境の整備は、ますます進んでゆくが、精神構造の整備は、どのようにしたら達せられるのであろう。 [S]

3. 建設省は先般、昭和42年度の建設投資予測を発表したが、その推計によると、建設投資総額7兆6387億円、内訳として建築4兆8621億円、土木2兆7766億円であって、その構成比は約6:4である。特に土木関係においては公共事業の伸びがいちじるしく、道路、港湾、空港、鉄道等の交通施設や、都市施設整備工事の伸びがその中でも目立っている。

昭和35年の建設投資実績2兆5078億円、特に土木9668億円からみるとこの7年間で2.8億となっている。このような建設投資、特にわれわれにとって土木事業への投資はどのように伸びるかということは非常に興味があることである、それはどのようにわれわれ土木技術者が力を発揮できるか、また、われわれの技術がいかに社会に貢献するか、一つの指標を表現しているからである。

建設投資は社会的条件により国民経済の中において、社会資本の充実という目的の外に、景気調整の手段としても考えられるようになり、一段と社会活動の中でも重視されるようになってきた。このことは、建設物価、公害、労働等々、あらゆる問題が種々複雑に複そうしている。これらあらゆる問題を考えると、われわれは単に投資の伸びに手ばなしで喜んでいられない大変な問題があるはずである。しかし一方、さらに建設省は、経済社会発展計画の最終年度に当る昭和46年度には、建設投資は10兆円余に達するといっているが、いかがだろうか。 [C]

第52巻第4号から同9号までの本欄の執筆者は J・片瀬貴文(国鉄)、S・小笹太郎(大林組)、C・細井正延(名工大)、E・事務局編集課の四名でした。